

メッセージアウトライン 出エジプト記10:1~29 「いなごと暗闇の災害」

血、蛙、ブヨ、アブ、疫病、腫れもの、雹と七つの大災害が起こったにもかかわらず、ファラオの心は頑なでイスラエルの民をエジプトから出て行かせようとはしなかった。ファラオの頑なさも主なる神の摂理のもとにあるが、主は彼の頑なさのゆえに続けて災害をエジプトに下される。

[1-2] 主はモーセにまたファラオのところに行くように命じられる。そして、ここではなぜ主がさまざまな災害を起こされるのかということの意味が主ご自身によって述べられている。

①主がエジプトに対してなされたしるしを息子や孫に語って聞かせるため。(2) つまり、イスラエルの主なる神がエジプトをさまざまな災害で打たれたことを子孫に語り聞かせるため。

②イスラエルの民が「わたしが主であることを知る」(2) ためである。

[3-6]モーセとアロンはファラオのところに行き、彼に向かって言った「へブル人の神、主はこう言われます。『いつまで、わたしの前に身を低くするのを拒むのか。私の民を去らせ、彼らがわたしに仕えるようにせよ。もしあなたが、私の民を去らせることを拒むなら、見よ、わたしは明日、いなごをあなたの領土に送る。いなごが地の面をおおい、地は見えなくなる。また雹の害を免れてあなたがたに残されているものを食い尽くし、野に生えているあなたがたの木をみな食い尽くし、あなたの家とすべての家臣の家、および全エジプトの家に満ちる。これは、あなたの先祖も、またその先祖も、彼らがこの土地にあった日から今日に至るまで、見たことがないものである。』」こうして彼は身を翻してファラオのもとから出て行った。

主は、今度はいなごの災害をエジプトに送られる。いなごがエジプト全土をおおい、地は見えなくなり、先の雹の災害を免れて生育している小麦などの作物をみな食い尽くしてしまうというのである。そしてさらに、このいなごはファラオの家臣や全エジプトの家に満ちるとも言われる。この国ではいなごの大発生による災害はそれまでもたびたびあったと思われるが、今回はそれらの規模をはるかにしのぐ、かつてなかったような最大規模の災害になるのである。この「いなご」はトノサマバッタの一種と思われる。普通このバッタは単独で住み、移動しないが、高温多湿の条件下で狭い地域に大発生すると、ある種の生理的変化が起こり、黒く変色して作物を食い尽くしつつ大移動するようになる。このようなバッタは日本語では飛蝗(ひこう)とも呼ばれ、一日で50キロメートルほどの速さで移動する。ヨエル書1:10~12、2:1~10にはその恐ろしい被害の描写がある。

[7] モーセとアロンがいなごの大災害が起こると宣言してファラオのもとから出て行

くと、ファラオの家臣たちは不安になって、このままではエジプトは滅びると思い、ファラオにイスラエル人たちを去らせ、主に仕えさせるようにと進言する。

[8-9]「モーセとアロンはファラオのところに連れ戻された。ファラオは彼らに言った。『行け。おまえたちの神、主に仕えよ。だが、行くのはだれとだれか。』モーセは答えた。『若い者も年寄りも一緒に行きます。息子たちも娘たちも、羊の群れも牛の群れも一緒に行きます。私たちは主の祭りをするのですから。』」

ファラオのもとへ連れ戻されたモーセとアロンにファラオはエジプトから出て行って主に仕えよと妥協するが、出て行くのはだれとだれかと詰問する。彼はごく一部の者が出て行くと思っていたのかもしれない。これに対してモーセは出て行くのはイスラエル人全員であり、羊の群れも牛の群れも連れて行くことと答えた。要するに全財産も含めたすべてをもって全員で出て行くというのである。

[10-11]「ファラオは彼らに言った。『私がおまえたちとおまえたちの妻子を行かせるようなときには、主がおまえたちとともにあるように、とでも言おう。だが、見ろ。悪意がおまえたちの顔に表れている。そうはさせない。さあ、壮年の男子だけが行って、主に仕えよ。それが、おまえたちが求めていることではないか。』こうして彼らはファラオの前から追い出された」

10節はわかりにくい文であるが、要するにファラオはイスラエル人の妻子たちだけは留めておいて壮年の男子だけが行くことを許可しよう考えたのであろう。そうすれば出て行った男たちはやがて帰って来るという計算である。しかし、モーセがイスラエル人全員と家畜も一緒にと言ったのでファラオは怒り、モーセとアロンは悪意を持っており、それが顔に表れているので「そうはさせない…」と言って彼らを追い出してしまった。

それとついでに、いなごの大災害が起こることになる。第八番目の災害である。

[12-13]「主はモーセに言われた。『あなたの手をエジプトの地の上に伸ばし、いなごの大群がエジプトの地を襲い、その国のあらゆる草木、雹の害を免れたすべてのものを食い尽くすようにせよ。』モーセはエジプトの地の上に杖を伸ばした。主は終日終夜、その地の上に東風を吹かせた。朝になると東風がいなごの大群を運んで来た。」

この東風はシナイ半島やパレスチナ方面から吹いてくる風であり、この風がいなごの大群が移動するのに重要な役割を果たした。

[14-15]「いなごの大群はエジプト全土を襲い、エジプト全域にとどまった。これは、かつてなく、この後もないほどおびただしいいなごの大群だった。それらが全地の表面をおおったので、地は暗くなり、いなごは地の草と、雹の害を免れた木の実をすべて食い尽くした。エジプト全土で、木や野の草に少しの緑も残らなかった」

これは恐ろしい光景である。雹の害を免れた小麦や裸麦、その他の作物、実を結ぶ樹木はすべてこのいなごの大群によって食い尽くされてしまった。それだけで

はなく、このいなごはエジプト人の家々に侵入し、大きな害を与えたであろう。緑豊かな大地は全く変わり果て、砂漠のようになってしまった。

[16-17]「ファラオは急いでモーセとアロンを呼んで言った。『私は、おまえたちの神、主とおまえたちに対して過ちを犯した。どうか今、もう一度だけ私の罪を見逃してくれ。おまえたちの神、主にこんな死だけは取り去ってくれるよう祈ってくれ。』」

この大災害に襲われ、心頑ななファラオもついに自分の非を認め、モーセとアロンを呼び寄せ、いなごの大群をエジプトから取り去ってくれるように主に祈ってくれと頼んだ。

[18-19]「モーセはファラオのところから出て、主に祈った。すると主は風向きを変え、非常に強い、海からの風とされた。風はいなごを吹き上げ、葦の海に追いやった。エジプト全域に一匹のいなごも残らなかった」

この「海からの風」とは東の紅海からではなく北の地中海からの風のことと思われる。その強風によっていなごの大群は葦の海すなわち紅海の方へ一匹残らず吹き飛ばされてしまった。

それで、ファラオはモーセたちの願いを全面的に受け入れたかというところではなかった。

[20]「しかし、主がファラオの心を頑なにされたので、彼はイスラエルの子らを去らせなかった」

これは「主がファラオの心を…」とあるように、主なる神の支配とご計画のもとに起こったことである。主がファラオの心変わりを知らなかったということはない。主はご自分のご計画のうちにみこころによって彼の心を頑なにされたのである。→7:3-5、9:16-17、ローマ9:17-18

この出来事の後、今度は、主はモーセをファラオのもとに交渉に行かせることなしに、すぐに第九番目の災害をエジプトにもたらされる。

[21-22]「主はモーセに言われた。『あなたの手を天に向けて伸ばし、闇がエジプトの地の上に降りて来て、闇にさわられるほどにせよ。』モーセが天に向けて手を伸ばすと、エジプト全土は三日間、真っ暗闇となった」

この暗闇は「さわられるほど」と言われているように、非常に濃い闇であった。もちろん明かりを灯すことはできたであろうが、しかしその明かりの光が遠くまで届かないほどの闇であったのであろう。これは学者の間では砂嵐によってできた闇ではないかと考えられている。砂漠の大量の砂が猛烈な風で吹き上げられ、その砂のため太陽の光はさえぎられ、人びとは外へ出ることができなくなり、視界はほとんどゼロになり、空気は砂ぼこりでよどみ、重苦しくなる。いなごを吹き払った風が、今度はこのように砂嵐を巻き起こしたということは十分に考えられることである、そしてこの状態が三日間続いたのである。

[23]「人々は三日間、互いに見ることも、自分のいる場所から立つこともできなかつ

た。しかし、イスラエルの子らのすべては、住んでいるところに光があった」

この暗闇の災害によりエジプトの政治、経済、生活、あらゆる活動は麻痺してしまったであろう。そしてこれはまたエジプト人の拝む太陽神ラー（[レー]ともいう）に対するさばきともなっている。太陽は光と熱をエジプトに与え、豊かな実りをもたらすのでエジプト人はこれを最も大切な神として崇拝していたのである。しかし、その太陽の光がさえぎられ、闇になってしまったので、これはエジプト人の信じる神に対するさばきとなっているのである。しかし、イスラエル人の住む地は主の特別な配慮があって守られ、そこには光があった。

[24]「ファラオはモーセを呼んで言った。『行け。主に仕えるがよい。ただ、おまえたちの羊と牛は残しておけ。妻子はおまえたちと一緒にいってもよい。』」

ファラオがモーセを呼び寄せたのは、この三日間の闇が去ってからであろう。その最中では身動きが取れない。ファラオはいなごの災害の時よりもさらに譲歩して、羊と牛はとどめておき、妻子たちは一緒にいってもよいとまで言う。しかし、モーセはこの条件も受け入れない。

[25-26]「モーセは言った。『あなた自身が、いけにえと全焼のささげ物を直接私たちに下さって、私たちが、自分たちの神、主にいけにえを献げられるようにしなければなりません。私たちの家畜も私たちと一緒にいきます。ひづめ一つ残すことはできません。私たちの神、主に仕えるために、家畜の中から選ばなければならないからです。しかも、あちらに着くまでは、どれをもって主に仕えるべきか分からないのです。』」

「全焼のいけにえ」とは羊や牛を祭壇で一部ではなく全部焼いて、献身のしるしとして神にささげること。モーセは主に仕えるため、どの家畜をもって主に仕えるべきか分からないのでひづめ一つ残さず家畜も全部一緒に連れて行くと言う。「ひづめ」とは牛、羊、馬、象などの足の裏にある硬い角質の爪のこと。家畜全部といっても、それは「私たちの家畜」であって、エジプト人の家畜まで連れて行くと言っているのではない。

[27]「しかし、主がファラオの心を頑なにされたので、ファラオは彼らを去らせようとはしなかった」

大災害による被害を受けた時には譲歩するが、モーセに願ってそれが過ぎ去ると、また心を頑なにしてイスラエルを行かせようとはしない。これほど心頑なに人物も珍しいと思われるが、すべては主なる神の摂理、ご計画の中でののごとは進んで行く。ファラオの頑なさのゆえに今まで九つも災害が起こり、エジプト人はまことの神、主の御力をいやというほど味わわされた。エジプトは偶像の神々が満ちていたが、それらは皆、人間の頭で考えだしたもので、何の力もないということをエジプト人は思い知らされ、イスラエルの神、主こそ力あるまことの神であることを知るようになってきた。これこそ、主がファラオの心を頑なにされた目的の一つなのである。

[28-29]「ファラオは彼に言った。『私のところから出て行け。私の顔を二度と見ないように気をつけろ。おまえが私の顔を見たら、その日に、おまえは死ななければならない。』 モーセは言った。『けっこうです。私はもう二度とあなたのお顔を見ることはありません。』」

28節はファラオの最終通告とも言えることばである。今までファラオは怒ってもそこまでは言わなかった。しかし、ついに彼は決定的なことばを口にした。彼は悔い改めるところか、自分の面子と権威にかけてモーセと対立を続けるのである。また彼はエジプトの国全体のことを考えてもいない。専制君主というのはそういうものなのである。

29節はファラオのことばを受けて、モーセが自分から進んで彼のところへ行くことはもう二度とないということの宣言である。しかし、主からの命令があれば彼は行って主からのことばをファラオに伝えなければならない。事実、次の11章ではなおもう一度モーセはファラオに主からの重大なメッセージを告げている。彼は個人的な好き嫌いなどの思いではなく、何よりも主なる神のみ声に聞き従おうとする。そしてついに第十番目の災い、最終的な神のさばきがやって来るのである。

主はモーセを立ててイスラエルをエジプトから脱出させようとする。繰り返し、繰り返しファラオの拒絶にあっても、なおも彼は主に従い、主からのことばをファラオに告げ、エジプトはそのたびに大きな災害に見舞われる。これは長い年月にわたってイスラエル人を苦しめてきたエジプトに対するさばきであり、また、イスラエルの神、主こそ、生けるまことの神であるということをつらとエジプト人に心底知らしめるためであった。

モーセが従順に主に従っていったがゆえにエジプトのさばきと出エジプトの大事業が実現するのである。そして、同様に神の御子イエス・キリストは、私たちを愛して父なる神のみこころに心から従われ、この世に人となって来られ、実に十字架の死に至るまで従順に従われたのであった。

このイエスの死に至る従順のゆえに、私たち人間に救いの道が開かれ、誰でもこのイエスを自分の罪の贖い主、救い主として信じ受け入れるならば、救われ、神のものとなされ、永遠の滅びから永遠のいのちへと脱出できるのだということを知らなければならない。

私たちはエジプトのファラオのように心を頑なにしておぼえを受け取る者になるのではなく、小羊のように従順に、主なる神に聞き従い、天の御国へと続く道を歩み続けていきたい。

→ピリピ2:6～11、ヨハネ1:12, 3:16、Iヨハネ5:5, 13